

## 5年目の「3. 11」に想う

平成23年3月11日の地震発生時、前任校の職員室で定期テストの素点をコンピュータに入力していました。

ある教員が「地震だ!」とつぶやきました。自分は全く感じませんでした。時間がたつにつれて現地の情報が少しずつわかってきました。

このあたりのことは、みなさんよくわかっていると思うので、省略します。

平成24年に、仕事で仙台に行くことができ、震災の状況や復興の様子を見ることができました。その後は、マスコミからの状況と、私が通っている近所の居酒屋にくる飲み友達が測量技術者として頻繁に東北へ行っているのので、その話を聞くことしかありませんでした。

しかし、時は進み5年がたちました。

今回は、5年たって素直に感じていることを3つ書きます。

1つめは、自然のすごさです。

どれだけ科学の知見が進歩しても、我々人類には対応できないことがあります。あの津波のエネルギーを見ればわかることでしょう。自然に対して「恐れ」の気持ちを持つことは大切なのではないのでしょうか。

2つめは、時間です。

我々はどうしても「今」を中心に物事を考えます。科学的にこの世が始まって140億年、人類誕生は400万年前程度のこと。人生たった100年。津波は今起こるかもしれないし、何百年起こらないかもしれない。しかし、宮城の閑上には80年前の津波のことが立派な石碑として残っていた。でも生かされなかった。この時間を寿命としての数十年間に如何に伝えるか。今のデジタル環境でもうまくいくかわからない。

3つめは、子供たちです。

実は、平成23年6月に行われた部活動の県体予選で、となりのコートのベンチに見慣れない学校名のユニフォームを着ていた選手がいました。声をかけると福島から非難してきた生徒でした。お母さんとこちらへ来て、お父さんは福島ではたらいしているとのこと。教員らしく「がんばってね」といったら「ありがとうございます」と笑顔とともに返ってきました。その後どういう進路を歩んだかは知る由もない。しかし、彼女のことはいつも心に残っている。このような子供たちが全国にいることだろう。自分には何もできないが、できるだけ良い方向に進んでほしい。

もっともっと思うことかきたいことがある。しかし、ここでは素直に脳裏をよぎったことだけを書いた。